【121】

氏　名(本　籍)	中野目（なかのめ）　徹（とおる）（福島県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　797　号
学位授与年月日	平成 4 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	政教社の研究

主　査	筑波大学教授	文学博士	大濱徹也
副　査	筑波大学教授	文学博士	熊倉功夫
副　査	筑波大学助教授	文学博士	池田元
副　査	筑波大学助教授		千本秀樹
副　査	筑波大学教授	文学博士	宮田登
副　査	筑波大学教授		嶋田厚

論　文　の　要　旨

本論文は，政教社が営んだ思想運動につき，三宅雲嶺・志賀重昂・内藤湖南らを中心に，思想集団としての存在形態とその主唱した「国粋主義」の特質を，明治10～30年代の時代状況に位置づけて検討したもので，序章・終章をふくめ 8 章26節からなる作品である。その視点は，政教社の組織としの実態と機関誌の全貌を把握する基礎作業をふまえ，初期政教社がこころみた実践運動と思想の展開をあとづけ，「国粋主義」の歴史的位相を明らかにしようとしたものである。

序章「政教社研究の課題と方法」は，明治15年に政教社が誓約集団たる同志的結合として発足したことをふまえ，従来の研究史にみられるイデオロギー論的研究の不毛さを指摘した上で，基礎研究すら皆無にちかい状況を問い，思想集団としての政教社の歴史的存在形態の解明をとおし，その言論活動がおびていた思想性を，「同志」的結合が解体する明治33年までを「初期政教社」と位置づけ，論究する対象としたことをのべたものである。

第Ⅰ章「明治十五年の書生社会」は，政教社に結集する青年の世代的特質を，「書生社会」のなかに位置づけて問い，雑誌創刊の意味を明らかとなし(第 1 節)，その人脈形成と思想形成を東京大学文学部－三宅雄二郎の場合－(第 2 節)，札幌農学校－志賀重昂の場合－(第 3 節)，秋田師範学校－内藤虎次郎の場合－（第 4 節）を検討し，各々が明治10年代を前後する時期に進化論思想と自由民権運動にふれていることを明らかにしたものである。

第 2 章「「国粋主義」の思想形成－三宅雄二郎に即して－」は，三宅の思想形成過程を分析すべく，

東京大学における進化論の受容を概観し(第1節)，フェノロサが講じたスペンサーの社会進化論について，その哲学史講義の分析によって位置づけ(第2節)，三宅がフェノロサから学んだ社会進化論的発想をふまえ，「進歩」の概念を「文明」の発展段階論と結びつけることで「進歩」の概念へと転回させ，究極に宇宙の存在を説く独待の有機体説に立つ思考方法を身につけたのみならず，自由民権運動に対して「漸進主義」の立場によって一定の距離を措いていたとなし（第3節)，三宅をはじめとする政教社に集う「同志」が，政談と学術が区分されようという状況下にあって，「主権論争」に対し一定の距離をとることで，「国粋主義」によって立つ言論活動への準備となした点を力説する（第4節)。

第3章「政教社の設立」は，書生社会から選別された知識集団である学士社会が成立し（第1節)，その基盤の上に政教社が設立されたのであり（第2節)，「同志」たちの諸活動の終接点として思想活動の総意をゆるやかに包摂する精神的紐帯として機能することに組織の特質があり(第3節)，雑誌『日本人』が思想伝達の「器」であるのみならず，思想交歓の「場」にもなっていたという両面を，執筆者である「同志」と読者のありかたを分析することにより，具体的に解明し（第4節)，政教社の存在形態を位置づけたものである。

第4章「「国粋主義」の理論と実践」は，「国粋主義」の理論化をめぐり，志賀重昂が生物進化論の発想をふまえ「国粋」を「日本の開化」の価値規準とみなしていたこと（第1節)，三宅雪嶺が東西文明の融合を「哲学」の次元ではかり，「日本人」が世界の文明進歩に貢献できる「自家固有の特質」を伸張しようとの決意を表明していたことを説き（第2節)，設立直後の政教社が大同団結運動に参加していく態様を検討することで，「国粋主義」の理論化をめぐり志賀と三宅が相異する方向に歩みはじめる予兆がみられる点を指摘し(第3節)，明治22年夏の大隈重信の条約改正反対運動で政教社がはたした役割を分析し，政教社の政治姿勢が確立していく様相をのべたものである(第4節)。
第5章「政教社の変貌」は，明治24～27年にかけ，政教社が志賀と三宅を中心に内藤湖南らが新たに参加することで，組織において「罔両窩同人」制へと変貌し（第1節)，雑誌の表題が『亜細亜』と改題され，「国粋」から「亜細亜」へと言論活動の軸が転回し，移住・植民が論じられ，東洋盟主論に与する論調が目立ち(第2節)，対外硬運動に参加し，新聞雑誌同盟の中枢部を担い，政治運動を指導することとなる（第3節)。
政治に対する三宅と志賀の差異は，三宅の『我観小景』と志賀『日本風景論』の世界を分析することで位置づけるべく，三宅が「我」から宇宙への思想回路をきづくことで国家に対する一定の留保を持ちえたのに対し，志賀が領土拡大への視野を提示したという意味で政治的課題に応じたものであると指摘している（第4節)。

第6章「日清戦後社会と政教社」は，明治28年7月に創刊された第三次『日本人』発行の時代状況を問い，政教社「同人」の組織が原形を失い（第1節)，日清戦争後に時代思潮となった「世界主義」と「国家主義」との相克の狭間で，政教社の「国粋主義」が自己主張すべき場を失っており（第2節)，『日本人』は在野党合同問題の渦中で進歩党に加担し，志賀が現実政治の世界に接近して任官することで，「哲学者」三宅との間に埋めがたい距離が生じた（第3節)。三宅は政教社によって

政治を論ずることで自己の場をきづこうとしたが，「国粋主義」を主唱した政教社の思想活動は行きづまっていた（第4節）。

終章「政教社の思想的境位」は，政教社が明治33年志賀の政界進出で『日本人』が三宅の学校と目されたように，「誓約」にもとづく思想集団の特質が失われることで終焉した状況をふまえ，日清戦争を経るなかで「国粋」と「西洋」がかもす緊張関係が消滅し，「国粋主義」の創造意欲が減退することで，初期政教社の活力が失われたと位置づけたものである。

審　査　の　要　旨

本論文は，政教社が明治10年代の書生社会のなかに生まれ，20年代になると言論界の一翼をにない，「国粋主義」の名の下に展開した思想運動の相貌を，政教社に結集した「同志」の言論活動を集団の思想史として叙述すべく，三宅雪嶺・志賀重昂・内藤湖南の軌跡を軸に，日本の近代化をめぐる思想のドラマとして描かんとしたものである。

政教社の研究は，徳富蘇峯が主宰した民友社の研究にくらべ，ほとんど手がつけられていない。本論文は，政教社結社日の確定をはじめ，巻末「史料及び参考文献一覧」にみられるように，政教社同人にかかわる第一次資料を探索するとう基礎作業をふまえ，その言論活動を時代社会に位置づけようとしたもので，政教社に関するはじめての本格的な論文である。その特色は，(1) 政教社の組織の実態と機関誌『日本人』とその後継誌の全貌を明確にしたこと，(2) イデオロギー論として論難されがちの政教社像を批判し，時代人心に位置づけた等身大の政教社像を提示しようとしたこと，(3) 政教社が「書生社会」を基盤に成立しえたことを明らかにしたこと，(4) 大同団結・条約改正・対外硬運動等の政治運動とのかかわりで政教社「同人」の言論活動を位置づけようとしたこと，(5) 「国粋主義」の位相をあとづけようとしたこと，等々をあげることができる。本論文は，これらの論点をふまえ，初期政教社の全体像を解き明かしたものといえる。

これらの論点は，意欲的なものであるが，思想の特質を機能する場において把握したがために，三宅雪嶺・志賀重昂の思惟構造の比較分析がいま一つ十分でない。そのため国粋主義がおびた多義性のもつ意味を積極的に展開しえなかった。この問題は，政教社の文明論・産業論・政策論を検討することとかかわるだけに，今後に期待したいところである。

ここに提示された政教社像は，思惟構造の比較分析においてやや不十分であるとはいえ，日本近代思想史の上に燦然たる位置を占めるにふさわしい思想集団の特質をはじめて描き出したものといえる。その意味では今後の政教社研究に大きな足場となる作品である。

以上のような問題点があるとはいえ，本論文は，基礎資料をもとに政教社の成立過程を具体的にあとづけ，その言論活動をささえた思想的営為を三宅雪嶺・志賀重昂の軌跡を軸に分析することで，「国粋主義」の帰趨を問わんとした論文として高く評価することができる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。